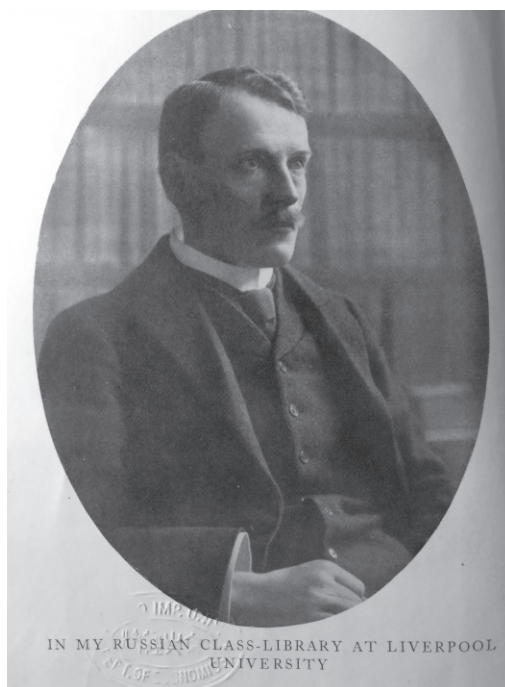


イギリスのロシア研究における雑誌 *The Russian Review* (1912-14) ——共同編集者ペアズとベアリングを中心に

松枝 佳奈

1. はじめに

本論は、1912年から1914年にかけてイギリスのリヴァプール大学ロシア研究科が発行し、ロシア研究を扱った全十号の学術雑誌*The Russian Review*を研究対象とする。特に、共同編集者であった二名のイギリス人ロシア研究者——ロシア史家のペアズ (Sir Bernard Pares, 1867-1949) と小説家・詩人・戯曲家・ジャーナリストのベアリング (Maurice Baring, 1874-1945) に注目したい。この二名の経歴については、後述する。



第1図：ペアズの肖像写真 (Bernard Pares, *My Russian Memoirs*. London: J. Cape, 1931.所収)

欧米の英露関係史研究では、ロシア研究者が十九世紀後半から二十世紀初頭までの英露の友好関係に与えた影響について、限定的ではあるが、考察が試みられてきた¹⁾。ロシアの英露関係史研究でも、当時のイギリスのロシア研究と関係人物たちの包括的な研究が存在する²⁾。しかし両国の政治や外交、経済の関係を中心に取り扱う英露関係史研究では、ペアズやベアリングのように学術や文学、ジャーナリズムの分野で主に活動した人物たちの活動や貢献は大きく取り扱われず、彼らのロシア研究や出版物に関する具体的な考察もほとんど見られない³⁾。本論で扱う *The Russian Review* の存在は、先行研究において把握され、同誌掲載記事が一部引用されてきたが、この雑誌そのものはいまだ総体的に論じられていないといえる。

本論では、まず明治・大正期の日本における英国のロシア研究受容の一例を見ることで、20世紀初頭の英国のロシア研究を検討する必要性を論じる。つぎに筆者の調査に基づき、同誌の基礎的な書誌情報や概要を述べる。そして創刊号に掲載された発刊の辞“From the Editors”を取り上げ、ペアズとベアリングを中心に据えて、20世紀初頭のイギリスのロシア研究における同誌発行の目的や意図を考察する。

なお本論における「ロシア研究」という用語は、以下のように定めることが可能であると考えられる。政治や外交をはじめ、経済、軍事、社会、歴史、地理、民族、風俗、思想、文学、芸術、文化を包括的に取り上げて分析・考察し、ロシアという国やその関連する地域、そこに生きる人々について総体的に理解するという外国研究の一つである。管見の限りにおいては、このようなロシア研究は十九世紀中頃から二十世紀初頭にかけて主に西ヨーロッパや北米で大きく展開されたものであった。これに隣接する学問領域が、第二次世界大戦後から今日までアメリカを中心に発展してきたArea Studies「地域研究」であろう。ただしArea Studiesは、元来冷戦期の国際政治・外交における影響力の拡大や国益の増進を第一の目的としていた。このようなArea Studiesと、本論におけるロシア研究のような20世紀初頭までの西ヨーロッパや北米における外国研究の共通点や差異を示すことはきわめて重要であるが、紙幅の都合上、稿を改めたい。

¹⁾ Douglas G. Morren, 'Donald Mackenzie Wallace and British Russophilism, 1870-1919', *Canadian Slavonic Papers* 9(2), 1967, pp. 170-183. Keith Neilson, *Britain and the Last Tsar: British Policy and Russia 1894-1917*. Oxford: Clarendon Press, 1995. Michael Hughes, 'Bernard Pares, Russian Studies and the Promotion of Anglo-Russian Friendship, 1907-1914', *Slavonic and East European Review*, 78 (3), 2000, pp. 510-535. Michael Hughes, *Diplomacy before the Russian Revolution: Britain, Russia and the Old Diplomacy, 1894-1917*. London and New York: Macmillan Press Ltd. and St. Martin's Press, Inc., 2000. など。

²⁾ *A.H. Зашихин*. Британская Россия: второй половины XIX – начала XX века. Поморский гос. ун-т им. М.В. Ломоносова. Архангельск: Изд-во «Солти», 2008.

³⁾ 例外的な研究が注1のMorren論文や、以下の研究書である。Charlotte Alston, *Russia's Greatest Enemy? Harold Williams and the Russian Revolutions*. International Library of Twentieth Century History 9. London, New York: Tauris Academic Studies, 2007. ウィリアムズについては、注25を参照。

2. 明治・大正期の日本における英国のロシア研究受容

まず*The Russian Review*を検討する前に、なぜ二十世紀初頭のイギリスで展開されたロシア研究の実態を考察する必要があるのか、という点について述べておく。結論を端的に示すと、それは十九世紀後半から二十世紀初頭までのイギリスにおけるロシア研究が、明治・大正期の日本に少なからぬ影響を与えていたためである。その一つの例が、イギリスのロシア研究に注目し関心を寄せていた内田魯庵(1868-1933)であると考えられる。以下、魯庵の例から明治・大正期の日本で同時代のイギリスのロシア研究がいかにか受容されていたのかを確認する。

明治一昭和期の小説家・翻訳家・文芸評論家・随筆家であった内田魯庵が、実は同時代のイギリスのロシア研究に注目していた事実はあまり知られていない。魯庵は、1909(明治42)年、友人で小説家・翻訳家・ロシア研究者の二葉亭四迷(1862/64-1909)に対する追悼文のなかで、生前の二葉亭が彼に語ったという話を、以下のように記している。「朝日の通信員としてタイムスのブローウキツ或はマッケンジーたらん事を期すると同時に日本の為めの平和の戦士たらんとするが、故人の希望であつたらしい。が、此夙志は其緒にだに就くを得ずして白玉楼中の人となつた⁴⁾。〔傍線引用者〕」二葉亭は、死去する前年の1908(明治41)年、『東京朝日新聞』通信員として当時のロシアの首都サンクトペテルブルクに特派されている。魯庵によれば、ロシア特派直前の二葉亭の志は、新聞特派員という立場から、日露の平和や親善に寄与すべく、大いに奮闘することであったという。

そこで二葉亭が自らの新聞特派員の模範として挙げたのが、「タイムスのブローウキツ或はマッケンジー」であった。これは、十九世紀から二十世紀初頭までの間に、イギリスを代表する日刊紙『タイムズ』*The Times* (1785-)で、外国特派員として活躍した二人の新聞記者、ブローウイツ(Henri Georges Stephan Adolphe de Blowitz, 1825-1903)⁵⁾と、マッケンジー・ウォレス(Sir Donald Mackenzie Wallace, 1841-1919)を指していたと考えられる。

本論では、マッケンジー・ウォレスがより重要である。なぜなら彼こそが19世紀後半以降のイギリスにおけるロシア研究に貢献した先駆的存在であったからだ。マッケン

⁴⁾ 内田魯庵「二葉亭四迷の一生」坪内逍遙・内田魯庵編『二葉亭四迷』易風社、1909年、下ノ213-214頁。

⁵⁾ ブローウイツは、ボヘミア〔現在のチェコ西部〕出身。1870年頃より、『タイムズ』紙パリ支局通信員の知遇を得て、同支局通信員補佐として活動。1873年、局内での活動が評価されたブローウイツは同支局長に就任し、外交やジャーナリズムの分野で活躍した。ブローウイツの経歴は、以下を参照。“Blowitz, Henri Georges Stephan Adolphe de”, *The Encyclopædia Britannica: A Dictionary of Arts, Sciences, Literature and General Information* vol. 4, 11th ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1910, p. 89.

ジー・ウォレスは、スコットランド出身の著述家、ジャーナリストである⁶⁾。二十代後半まで国内外の大学で学問を修め、1870年、友人にロシアへ招待され、同国への関心を大いに深めた。その結果、1875年までの約六年間でロシア語や、地方行政、農業制度、農奴解放の歴史、金融、教育など、さまざまな分野のロシア事情を学んだ。そして帰国後の1877年、ロシア研究書『ロシア』*Russia*⁷⁾を出版し、一躍評判の著述家となる。この彼の処女作は、同時代と過去のロシア社会が包括的に分析され、確かな説得力をもちながら魅力的に記述されたため、瞬く間にロシア研究の名著となった⁸⁾。1877年の露土戦争を機に、『タイムズ』紙の外国特派員となり、サンクトペテルブルクをはじめ世界各地に滞在する。帰国後の1891年から1899年まで『タイムズ』紙の外報部長を務めた。

マッケンジー・ウォレスは、著書『ロシア』のなかで、このように主張している。“We ought to know Russia better, and thereby avoid unnecessary collisions.”⁹⁾「我々はロシアをよりよく理解し、それによって無用な衝突を避けるべきである。〔引用者訳。以下、英文の日本語訳はすべて引用者による〕」十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて帝国主義的政策を展開したイギリスでは、とりわけ同じくヨーロッパの列強として勢力を拡大したロシア帝国への関心が高まった。とりわけクリミア戦争（1853-1856）や露土戦争（1877-1878）はそのような契機となった重大な国際的事件であった。これに伴い、マッケンジー・ウォレスのように一部のイギリスの知識人はロシアに滞在したほか、同国の観察記や研究書を出版し、ロシアとの勢力均衡や友好関係の進展の必要性を主張したのである。イギリスのロシア研究は、この頃に本格化したといえるだろう。なおマッケンジー・ウォレスは、*The Russian Review*創刊号にも寄稿しており、イギリスのロシア研究者の先駆的存在として同誌の活動を支援し、研究を振興する立場にあった。

魯庵はその後もイギリスのロシア研究の状況を把握しつづけ、日本でも同様のロシア研究が展開される必要性を認識していた。その理由として、イギリスのロシア研究書を日本語に翻訳紹介した『露国民 全』（1913）の刊行に、魯庵が関わっていた点が挙げられる。

この原著は、*The Russian Review*誌共同編集者のベアリングが1911年に発表した*The Russian People*『露国民』であった¹⁰⁾。本書は、図版、統計、表などが豊富に掲載され、

⁶⁾ マッケンジー・ウォレスの経歴は、以下を参照。Donald Mackenzie Wallace “Preface”, Donald Mackenzie Wallace, *Russia*, London: Cassel & Co., 1877, pp. III-IV. “Wallace, Sir Donald Mackenzie”, *The Encyclopædia Britannica: A New Survey of Universal Knowledge* vol. 23, 14th ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1929, p. 303.

⁷⁾ Donald Mackenzie Wallace, *Russia*, London: Cassel & Co., 1877.

⁸⁾ Douglas G. Morren, “Donald Mackenzie Wallace and British Russophilism, 1870-1919”, *Canadian Slavonic Papers* 9, No.2, Autumn 1967, p. 172.

⁹⁾ Wallace, *Russia*, p. 609.

¹⁰⁾ Maurice Baring, *The Russian People*, London: Methuen & Co. Ltd, 1911. ベアリングの経歴については、以下を参照。“Baring, Maurice”, *The Encyclopædia Britannica: A New Survey of Universal Knowledge* n vol. 3, 11th ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1929, p. 112. “Baring, Maurice”, *The Encyclopædia Britannica: A New Survey of Universal Knowledge*, vol. 3, 14th ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1955, p. 112. 「ベアリング」岩波書店辞典編集部編『岩波 世界人名大辞典』第二分冊、岩波書店、2013年、2503頁。



第2図：ベアリングの肖像写真（モーリス・ベアリング著、
大日本文明協会編訳『露国民 全』大日本文明協会事務所、1913年所収）

多色刷りのロシア地図四枚が附録として収録された。ロシアの地理や歴史、民族的特質、風俗習慣、宗教、思想、革命運動など、さまざまな分野のロシア事情が包括的に論じられ、本格的なロシア研究書であったと評価できる。また同書には少なくとも第二版が確認されることから、出版当時、イギリス国内で評判であったことがうかがわれるだろう。

ベアリングは、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジを中退した後、1898年から1904年まで外交官を務めた。1904年に文筆に転じ、ロシアを訪問する。日露戦争時には『モーニング・ポスト』紙の満州特派員となり、1905年から1908年までロシアに、1909年にイスタンブールに滞在した。ロシアや満洲での経験や既出の新聞記事をまとめ、『満洲でロシア人とともに』*With the Russians in Manchuria* (1905)、『ロシアにおける一年』*A Year in Russia* (1907)、『ロシアの随筆と物語』*Russian Essays and Stories* (1908)の計三冊のロシア関係の書籍を発表している。1912年、『タイムズ』紙通信員としてバルカン戦争に従軍したほか、第一次世界大戦時には軍人として参戦する。後半生は豊富な体験を生かし、詩や小説、戯曲などの発表に専念した。

ベアリングは、文学を中心にさまざまな分野のロシア事情の紹介者として啓蒙的役割を果たした。すでに挙げた三冊や『露国民』のほかにも、複数のロシア関係の書籍や研究書を出版している。そのような著作として、ロシア文学事情を解説した『ロシア文学

のランドマーク』 *Landmarks in Russian Literature* (1910) や、『ロシア文学概説』 *An Outline of Russian Literature* (1914-1915)、ロシアの社会や生活の諸側面を研究した『ロシアの原動力』 *The Mainsprings of Russia* (1914) などが挙げられる。

*The Russian People*の日本語訳である『露国民 全』の「例言」では、ベアリングの経歴やイギリスにおける評価が述べられたあと、以下のように記されている。

本会〔大日本文明協会〕が本書翻訳の許可を氏〔ベアリング〕に求むるや、氏は直に快諾せられたるのみならず、種々同情ある助言を与へ、巻頭に掲ぐる氏の小照の如きは、本会の請に応じて特に遙々寄贈せられたるものなり。本会は、氏に対して満腔の感謝を表せざるべからず。又本書選定に關して援助せられたる内田貢（魯庵）氏及び之が翻譯の勞を執られたる衛藤利夫氏に向つても茲に謹んで感謝の辞を呈せんと欲す¹¹⁾。〔傍線引用者〕

大日本文明協会（1903-1938頃）は、大隈重信ら早稲田大学系の人物たちが中心となって設立した明治期から昭和期までの啓蒙的学術・文化団体である¹²⁾。同会が翻訳の許可にあたり、ベアリング本人に直接許可を取ったところ、快諾したのみならず、さまざまな助言を与えて自らの肖像写真も提供するなど、同協会の活動に対して非常に好意的に協力したことが分かる。ベアリングの『露国民』を選定するにあたり助力したのが、ほかならぬ魯庵であった。これまで先行研究でこの事実が指摘されたことはないが、魯庵がイギリスのロシア研究に関心を抱いて注目していたことを示しており、大変重要であろう。おそらく魯庵が丸善で同書の存在を知って通読し、優れたロシア研究書と評価して、同協会に紹介したものと考えられる。衛藤利夫（1883-1953）は魯庵が終生交流した若き友人で、魯庵の紹介により『露国民 全』の翻訳を担当した。

ただし先行研究では、この『露国民 全』に翻訳上で重大な問題があることが指摘されている。ロシア史家の外川継男は、ベアリングの原著には存在する重要な論述の一部や、ロシアの思想家や作家の文章からの引用が、行単位あるいは頁単位で全面的に、かつ断りなく省略されていることを実証的に示した¹³⁾。翻訳者の衛藤が「ロシア語を知らないところから英語からの表記が目立つ¹⁴⁾」として、明らかな誤訳を具体的に示している。「『露国民露全』とタイトルに掲げられながら、決して「全」ではないということが問題なのである¹⁵⁾」と主張した。管見の限りにおいては、この外川の研究と論旨は大い

¹¹⁾ 「例言」モリス・ベアリング著、大日本文明協会編訳『露国民 全』大日本文明協会事務所、1913年、3頁。

¹²⁾ 同会については、佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』早稲田大学出版部、1991年、105-134頁を参照。

¹³⁾ 外川継男「昇曙夢とロシアをめぐる（二）」『えうゐ』第十五号、えうゐ編集委員会（北海道大学ロシア文学研究室）、1986年12月、82-83頁。

¹⁴⁾ 同論文、83頁。

¹⁵⁾ 同論文、87頁。

に支持すべきものである。魯庵は同書の翻訳に関与しておらず、衛藤の作業に対して確認や助言など行うことも特になかったと見られる。

なお、ベアリングの*The Russian People*を日本語に翻訳した『露国民 全』を参照し、その一部をほぼそのまま自らのロシア研究関係の著書で引用したのが、明治期から昭和期に活躍したロシア文学者・翻訳家の昇曙夢(1878-1958)であった。昇は1915(大正4)年出版のロシア研究書『露国及露国民』(銀座書房)のなかで、『露国民 全』を含む三冊の欧米のロシア研究書・滞在記の日本語訳から引用していた。しかしいずれの翻訳も「まったく恣意的な省略が行なわれ、しかも(中略)そこに断りがない¹⁶⁾」という不完全な抄訳であった。外川が主張するように、ベアリングの著作をはじめとする欧米のロシア研究書が「注も含めて完全な形で翻訳されていたならば、日本のロシア研究者をはじめ、知識人一般のロシア理解がいつそう深くなり、正確になった¹⁷⁾」可能性があっただろう。

だが明治・大正期の日本の知識人たちがロシア事情を理解する際に、同時代の欧米、とりわけイギリスのロシア研究を不完全な形ながらも受容し、多く参照していた点は、近代日本の文学者や知識人たちのロシア理解や同国事情の研究を検討する際に、改めて注目に値すると考えられる。近代のイギリスにおけるロシア研究を、当時の日本のロシア理解や同国事情の研究の源流の一つとして再考することは、近代イギリスのロシア研究の系譜にある近代日本のロシア研究の特質や問題点を浮き彫りにすることにもつながるのではないだろうか。さらに同時代の日英のロシア研究の比較対照にもなり、両国の知識人のロシア理解や対露認識の一端の解明も可能となるに違いない。そのなかでも雑誌*The Russian Review*は、イギリス本国でも広く知られていないが、20世紀初頭のイギリスのロシア研究のハイライトの一つとして再評価されるべきであろう。

3. ベアズとベアリングの問題意識

——世論とジャーナリズムに対するロシア研究の理想

ここで、イギリス国内で雑誌*The Russian Review*が発行される前年の1911年、のちに同誌の共同編集者となったベアリングが出版したロシア研究書*The Russian People*の序文を見ることとする。ベアリングは当時のイギリスにおけるロシア研究の問題点を指摘し、当時を代表するロシア研究者の名前を列挙している。

[...] students of Russian affairs in England have been, up to the present day, comparatively few, and those who have been in position to expound Russian life have nearly always addressed themselves to the student and not to the general

¹⁶⁾ 同上。

¹⁷⁾ 同上。ただし魯庵ら当時の日本の知識人の多くは、外国語の原書を講読していたと考えられる。

reader [...]; and popular books on Russia have suffered from fault of being written either by people who were ignorant of the subject, or, still worse, by writers with a strong political or racial bias. [...] It is needless to say that the average man is far more likely to swallow and assimilate the facile sensationalism of certain lurid impressionists, than to study the serious, well-built, and accurate works of the classic writers on Russia, such as Sir Donald Mackenzie Wallace, M. Leroy-Beaulieu, Professor Morfill, or Professor Pares.¹⁸⁾

(前略) イングランドのロシア事情研究者は、今日に至るまでかなり少数である。ロシア人の生活を詳説する地位にある彼らは、ほとんど決まって一般読者ではなく、研究者に向かって論じているのである。(中略) それに大衆的なロシア関係の書物といえ、ロシア事情に関して無知な者が著しているか、さらに悪いことには、強い政治的もしくは民族的なバイアスのある書き手が担っているという欠陥を負ってきた。(中略) 以下のようなことは言うまでもない。一般の人々は、ドナルド・マッケンジー・ウォレス卿やルロア＝ボリュエ氏、モルフィル博士あるいはペアズ博士のようなロシアに関する第一級の書き手たちによる、真剣で重厚かつ正確な著作の数々よりも、扇情的な感情論者たちによる、上っ面をなでただけの浅薄でセンセーショナルな表現をはるかに多く咀嚼し吸収しやすい。

ベアリングは、当時のイギリスではロシア語とロシア事情に精通したロシア研究者が非常に少なかったと主張した。そのごく少数のロシア研究者たちが大衆や一般読者に対してではなく、もっぱら専門家に向けてロシア事情を紹介し解説している点を、彼は問題視したのである。また一般読者の間で評判となるロシア事情の書き手が、総じて政治や民族問題に対して偏った思想を持った、感情的で浅薄な人物たちである点も批判した。ベアリングの意識は、一般読者向けの良質なロシア事情の解説書や研究書が存在しないことに向けられている。なぜロシア事情を十分に理解している研究者が一般読者に向けて分かりやすく、彼らの興味をひき、かつ正しく冷静な知識や情報を記そうとしないのか。これが、ベアリングが*The Russian People*を執筆した動機であった。紙幅の都合上、本論では詳細に論じることはできないが、そこでベアリングがとった戦略は、詳細で正確なロシア事情の知識や情報を提供しつつ、できる限り平易で簡潔な文体で、一般読者の興味や関心を喚起するような内容や魅力的な表現を盛りこむことであったと考えられる。そこには、当然、文学作品を創作する作家や詩人としての自負もあっただろう。自らの研究成果と文学者としての能力を生かしながら、これまでのロシア研究書とは一線を画する著作を世に問おうとしたのである。

¹⁸⁾ Baring, *The Russian People*, p. x.

そしてベアリングが、研究者や専門家に向けてのみ論じる「ロシアに関する第一級の書き手たち」として名前を挙げたのは四名——すでに言及したマッケンジー・ウォレスのほか、ルロア＝ポーリユー (Henri Jean Baptiste Anatole Leroy-Beaulieu, 1842-1912)¹⁹⁾、モルフィル (William Richard Morfill, 1845-1909)²⁰⁾、そしてロシア研究誌*The Russian Review*で実質的な編集長の役割を務めたペアズであった。翌年の1912年、彼はベアリングを同誌の共同編集者に迎えた。

19世紀末から20世紀前半に活躍したイギリスのロシア史家ペアズは、イギリス国内の複数の大学でロシアの歴史や言語、文学を講じ、数々のロシア研究書を出版したほか²¹⁾、イギリスにおけるロシア研究の振興や英露協商の推進に貢献した²²⁾。リヴァプール大学とロンドン大学にスラヴ・東欧研究科を創設したことも、イギリスのロシア研究におけるペアズの大きな功績である。

ベアリングは著書のなかで、ペアズを一般読者に向けてロシア事情を解説しない研究者として挙げたが、実はペアズも、ベアリングよりも以前に、彼の問題意識に近い見解を持っていたといえよう。1907年、英露協商が締結されたにもかかわらず、イギリス・ロシア両国のジャーナリズムが双方の国に対して基本的に無関心で、かつ嫌悪感や対立を煽っている状況を、ペアズは憂慮していた。1908年、リヴァプール商工会議所に講演者として招かれたペアズは、そのような状況をdanger「危機」と称して、以下のように主張している。

And how can we deal with this danger? Only in one way; only by real study of Russia; and that, to be effective, can only be carried out by a University. Just as our Government deals one by one with the questions of detail of foreign policy, so a University, on the principle of division of studies, can put different men to serious work on different subjects; and this is perfectly certain to react on public opinion and on journalism itself.²³⁾

¹⁹⁾ ルロア＝ポーリユーは、フランスの歴史家。パリ政治学校教授を務めた。ロシアに滞在し、同国の政治や経済を研究し、フランスの親ロシア政策に寄与した。主な著書は、ロシアの国家と国民、制度、宗教について記した全三巻の『ツァーリの帝国とロシア人』*L'Empire des tsars et les Russes* (1881-1889)。「ルロア＝ポーリユー」『岩波 世界人名大辞典』第二分冊、3251頁参照。

²⁰⁾ モルフィルは、ロシア語をはじめとするスラヴ諸語と、ロシアや東欧の文学を研究し、イギリスのオックスフォード大学で教鞭を執り、同大学のロシア研究やその講座の創設に尽力した。以下を参照。Gerald Stone, "Morfill, William Richard", Matthew, H. C. G. and Harrison, Brian eds., *Oxford Dictionary of National Biography: From the earliest times to the year 2000*, vol. 39, Oxford: Oxford University Press, 2004, pp. 93-94.

²¹⁾ Bernard Pares, *A History of Russia*. (New York: A. A. Knopf, 1926) は、改訂・増補・再版が繰り返され、二十世紀の欧米における代表的なロシア史研究書として高く評価されている。

²²⁾ Jonathan Haslam, "Pares, Sir Bernard", Matthew and Harrison eds., *op. cit.*, vol. 42, pp. 613-615.

²³⁾ Address Delivered on November 4th, 1907, to The Incorporated Chamber of Commerce of Liverpool on Russia: Trade Relations and University Study, by Bernard Pares, M.A. (Reader in Modern Russian History in the University of Liverpool). *The Incorporated Chamber of Commerce of Liverpool Monthly Magazine*, Nov. & Dec. 1907. Liverpool: C. Tinling & Co., Ltd, 53, Victoria Street. 1908, pp.1-24. p. 10.

そしてこの危機にどのようにして対処することができるでしょうか。その方法の一つです。真のロシア研究によるのみです。それを効果的なものとするのは、大学が実施することによってのみできるのです。わが国の政府が外交政策の詳細な課題に対して一つ一つ対処するように、大学も、研究分野の原則にのっとって、諸々の問題に対する真剣な研究に対してさまざまな人材を配置する。これで世論やジャーナリズムそのものに対して、必ず申し分なく影響を与えるでしょう。

ペアズの場合、ベアリングと異なり、一般の世論やジャーナリズムのロシア認識や同国に対する理解を変えることができるのは、大学における真剣なロシア研究のみであると確信していた。研究者たちが大学から正確かつ冷静なロシア研究の成果を発信すれば、世論やジャーナリズムによい影響を及ぼすことができ、英露関係にも変化を起こすことができるかと信じていたのである。

ペアズもベアリングも、イギリスの一般読者や世論、ジャーナリズムのロシアに対する理解や認識に働きかけ、積極的な影響や変化をもたらすことを目指した。しかし、それを実現するための具体的な方法や対策については両者の間に大きな隔たりがあり、互いに相容れることはなかった。それでも彼らは雑誌*The Russian Review*において協力関係を結び、共同編集者として名を連ねることになる。

4. *The Russian Review* 発刊とその展開

——同誌の概要と創刊号掲載 “From the Editors” を中心に

*The Russian Review*の正式な誌名は“The Russian Review: A Quarterly Review of Russian History, Politics, Economics, and Literature.”である。その名のとおり、年に四回発行され、毎号、ロシアの歴史や政治、経済、そして文学に関する英語の論文、解説、随筆が計十五本前後掲載された。管見の限りにおいては、その判型は、縦150mm×横220mmの菊判であったと推定される。

創刊号から最終号の第十号まで全号を編集したのは、ペアズとベアリングである。実質的な編集長として編集と発行を主導したのはペアズであったが、彼とともに編集の実務に関与していた第三の編集者も存在していた。いずれもペアズらイギリスのロシア研究者たちと緊密な関係にあったロシア研究者である。創刊号から第四号まではアメリカ出身のハーパー²⁴⁾が、第五号から第十号まではニュージーランド出身のウィリアム

²⁴⁾ ハーパー (Samuel Northrup Harper, 1882-1943) はアメリカ出身で、ロシアの政治・社会制度を専門とした研究者。イギリスでペアズらとロシア研究の発展に貢献し、リヴァプール大学やシカゴ大学で教鞭を執った。注15のウィリアムズとも公私にわたる親しい協力関係にあった。Paul A. Goble, Samuel N. Harper and the Study of Russia: His Career and Collection. *Cahier du monde russe et soviétique*, vol. 14, no. 4, Octobre-décembre 1973, pp. 608-620.を参照。

ズ²⁵⁾が編集を務めた。そのほか、第九号、第十号ではイギリスのポーランド研究者ボズウェル²⁶⁾が編集補佐を担った。

各記事の著者たちは、イギリスのロシア研究者のほか、ロシアの政治家、研究者、ジャーナリスト、思想家、文学者などであった。英露を代表するロシア関係者が集い、きわめて多様性に富んだ学術と言論の場が形成された。ロシアの思想や文化、社会、ロシア帝国領内の各地方、特にポーランドや極東の事情についても多く紹介と解説が行われている。筆者が同誌を分析する過程で把握した特徴は、号を重ねるうちに、ポーランド関係の記事の数が明らかに増加した点である。今後さらなる研究が求められるが、ベアズらイギリスのロシア研究者と協力関係にあった人物たちのなかにロシア帝国からの独立を目指すポーランド系の知識人たちが多く含まれており、彼らからの働きかけや相互の交流のなかでベアズ自身もポーランド事情に関心を深めていたことに要因があると考えられる。そのほか、当時のロシア関係のニュースを扱った彙報欄や短信欄のChronicleや、同時代やそれ以前に出版されたロシア事情の研究書や書籍を取り上げた書評欄Notes on Current Booksが毎号の末尾に置かれた。

同誌の論調は、執筆者の顔ぶれや記事の内容から見てきわめて自由主義的であり、ロシアにおける民主主義や議会政治を積極的に支持するものであったと指摘できる。この点に関する実証的な考察は稿を改めるが、同誌に寄稿したイギリスのロシア研究者たちは、同時代のロシアの政治運動の推移や議会政治の動向を注視し、場合によってはそれらを直接支援していたと考えられる。

なお、筆者は2019年に日本国内、およびイギリスのロンドンとリヴァプールにて本誌の所蔵について、調査を行った。その結果、少なくともロンドン大学スラヴ・東欧研究科附属図書館では原誌全十号の所蔵と一部の号の複数冊の所蔵が確認できた。また同図書館のアーカイブ史料に、ベアズが旧蔵していた文書や資料、書簡、日記等を収めたベアズ・コレクションが存在する。同コレクションには、*The Russian Review*誌の見本と推定される原誌の断片や記事の一部が含まれる。

さらに同誌には1979年出版のリプリント版が存在しており²⁷⁾、第一号—第四号、第五号—第八号、そして第九号—第十号に分冊された全三巻で構成されている。このリプ

²⁵⁾ ウィリアムズ (Harold Whitmore Williams, 1876-1928) はニュージーランド出身の言語学者・ジャーナリスト。スラヴ諸語のほか50以上の言語を学び、特にトルストイに深い関心を寄せ、ロシア研究に励んだ。ロシア出身のジャーナリストで、ロシア帝国の自由主義政党「立憲民主党 (カデット)」(The Constitutional Deomocratic Party, Cadet: Konstitutsionno-Demokraticeskaja Partii, K-D) の党员・政治家ティルコワ (Adriana Vladimirovna Tyrkova, 1869-1962) と結婚。イギリスでベアズやベアリングらとロシア研究の発展に尽力し、The Timesの外信部長として英露問題の論説記事を執筆。詳細は注3のAlstonの研究書を参照。

²⁶⁾ ボズウェル (Alexander Bruce Boswell, 1884-1962) は、イギリス出身のポーランド史家。代表的な著書に*Poland and the Poles*. London: Methuen, 1919.などがある。

²⁷⁾ *The Russian Review: A Quarterly Review of Russian History, Politics, Economics, and Literature*. Vol. 1 (No.1-4, 1912), Vol. 2 (No. 5-8, 1913), Vol. 3 (No. 9-10, 1914). The School of Russian Studies in The University of Liverpool. London: Thomas Nelson and Sons, Nendln/ Liechtenstein: Kraus Reprint, 1979. Reprinted by permission of Liverpool University Press.

リント版は、イギリス国内では少なくともリヴァプール大学ブランズウィック図書館に所蔵されているほか、日本国内でも北海道大学附属図書館、福島大学附属図書館、日本大学経済学部図書館、大阪大学附属総合図書館で閲覧することができる。したがって現在、日本国内で本誌の内容を確認する際には、リプリント版がもっともアクセスしやすい一次資料となる。

最後に、1912年発行の*The Russian Review*創刊号の巻頭を飾った“From the Editors”を見てみよう。この記事はいわゆる「創刊の辞」に当たるといえる。わずか2ページ足らずの短い記事ではあるものの、同誌創刊の意図や目的が明確に表れていると考えられる。“*The Russian Review* is an outcome of the solid development of interest in Russian affairs in England; [...]”²⁸⁾「*The Russian Review*誌はイングランドでロシア事情への関心が確実に高まってきた一つの結果である。(後略)」ここではその要因が主に政治と経済の二点にあることが指摘された。政治的要因として、ロシア国内で穏健かつ理性的な世論が徐々に形成され、ロシアにおける議会制度の創設やイングランドへの接近という態度の表れにつながっていることが示された²⁹⁾。経済的要因としては、ロシアからの穀物輸出の拡大や、ヨーロッパの資本に依存し、その市場との関係が深い同国の工業の発展が挙げられた³⁰⁾。

ペアズやベアリングら編集者たちがこのテキストで強調したのは、以上のような政治的・経済的要因のみにとどまらなかった。“Those who know and love Russia [...] are convinced that the wonderfully human influence of this great people is destined to have a far greater influence on the life and thought of Europe, and to teach many lessons which Europe will be glad to learn from it.”³¹⁾「ロシアを知り、ロシアを愛する人々は(中略)この偉大な国民〔ロシア人〕の素晴らしい人間的影響力がヨーロッパの生活と思想により大きな影響を持つことを、そしてヨーロッパが喜んで学ぶであろう多くの教訓を与えることを運命づけられていると確信している。」ペアズやベアリングたちは、ロシア人が備える精神性が政治や経済と同様に重要であることを認識していた。つまりロシアを十分に理解し研究するには、その政治・経済の情勢を把握し分析すると同時に、ロシア人の人間性や精神、思想を根本的に知る必要があると考えていたのである。このような彼らの信念から、同誌ではロシアの政治や経済の論考のみならず、その歴史や文学、文化の論説や解説、紹介にも重点が置かれたといえよう。

²⁸⁾ From the Editors. *The Russian Review: A Quarterly Review of Russian History, Politics, Economics, and Literature*. Vol. 1, No.1, 1912. The School of Russian Studies in The University of Liverpool. London: Thomas Nelson and Sons., p. 7.

²⁹⁾ Ibid.

³⁰⁾ From the Editors. *The Russian Review*. Vol. 1, No.1, 1912., p. 8.

³¹⁾ Ibid.

そして以下に、ベアズやベアリングらが目指したロシア研究の理想が端的に示されている。

To all these aspects of progress in Russia the *Russian Review* will attempt to do justice. In the School of Russian Studies at the University of Liverpool the *Review* has behind it not only a particularly strong committee to guarantee the permanence of its work, but also a centre for the University study of the many aspects of the life of Russia. [...]

The *Review*, as will be seen from the contents of this number and from the list of Russian collaborators, aims at on various subjects of Russians of diverse opinions, and thus of giving some perspective of that enormous Empire. It aims also at providing an organ for those English writers, so far isolated, who have striven to bring Russia into closer touch with us. It may thus help to acquaint the English public with Russia's work in arts, science, literature, and politics, both in the past and in the present.³²⁾ [傍線引用者]

同誌が、リヴァプール大学ロシア研究科が、同大学のロシア研究の持続を担保するための有力な協議の場となり、ロシアの生活の数々の側面に関わる大学研究の中心地となる後ろ盾としての媒体であると明示された。すなわち同誌が、当時のイギリスのロシア研究者にとって大学におけるロシア研究を振興し発展させる重要な手段であったことを意味している。前述のとおりロシア研究の拠点としての大学の重要性を唱えていたベアズの意向が、ここに強く反映されたと考えられる。

それと同時に、同誌がロシア人の事情を論じる著述家たちのための機関誌となること、イングランド社会が過去と現在のロシアの芸術作品、科学、文学、政治への理解を深めるのに役立つと主張された。この点は、ロシア研究に携わる学術関係者が世論とジャーナリズムの対露認識に作用する可能性を示したベアズの希望、そして一般社会や大衆を対象とした分かりやすく正しいロシア事情の解説や紹介を主張したベアリングの理念が大いに影響していたといえるだろう。

4. おわりに

*The Russian Review*の共同編集者であったベアズ、ベアリングの存在と彼らが共有した問題意識が、英露の学術界とジャーナリズム界を横断する多様な分野にまたがるロシア研究の発展と、イギリスのロシア研究者たちの提携や協力関係の構築に大きな役割

³²⁾ Ibid.

を果たしたと考えられる。一方で、内田魯庵や昇曙夢の例から明らかであるように、明治・大正期の日本のロシア研究には、ベアリングら同時代のイギリスのロシア研究者の影響が、不完全ながら確かに存在していた。この点において、十九世紀から二十世紀初頭までのイギリスのロシア研究は、近代日本のロシア研究の大きな源流の一つであったといえよう。

英露両国の友好関係が進展するにつれ、それまで個々で活動していたイギリスのロシア研究者たちは雑誌という場に集い、ロシアの知識人たちとの交流を図るために提携するようになったといえる。その一つの成果が、総合的なロシア研究を展開した*The Russian Review*であったのではないだろうか。引き続き、同誌の記事を詳細に分析することのほか、ロンドン大学スラヴ・東欧研究科アーカイブ所蔵のペアズ・コレクションの関連文書や記録、書簡などの内容を精査し、同誌が二十世紀初頭のイギリスのロシア研究にもたらした成果をより実証的に明らかにすることは、今後の課題である。

* 本研究は、日本学術振興会特別研究員奨励費（17J00009）の助成を受けたものである。

（本学非常勤講師）